
教職支援センター一年報

2012

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2012』目次

教職支援センター年報の発行に寄せて	教職支援センター長	山本 登朗	1	
＜投稿原稿＞				
教員の確かな実践力こそ児童生徒の「生きる力」を育む！！—大学の授業の役割と具体的方策の1事例—	非常勤講師	教職アドバイザー	藤井喜代美	2
国語科教育法を教授していく中での問題点	非常勤講師	石田 晋一	8	
ノートが取れる・文章が書けるための表現指導—書き取り・書き写しを活用して—				
	奈良工業高等専門学校	一般教科教授	鍵本 有理	13
各学部・大学院で取得できる免許状の種類・教科				19
介護等体験 参加者数				21
中学校・高等学校教育実習生数				22
教員免許状取得状況・取得者数一覧				23
教員採用試験合格状況・合格者数				30
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果				33
教員採用試験 試験日・合格発表日等について				34
教員採用試験対策支援スケジュール				36
主な教職支援内容について				37
他キャンパスにおける教職相談日程				38
教員採用試験 筆記試験対策について				39
教員採用試験の合格をめざして（講演要旨）				45
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～				53
2年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について				54
介護等体験事前指導について				55
本学卒業新任教員の方々との情報交換会				56
3年次生対象「教育実習ガイダンス」について				57
教員採用試験合格者との情報交換会				58
教職専門科目担当者研究会				60
教員採用試験合格者壮行会				61
教職に関する専門教育科目担任者一覧				62
教育実習出向指導校一覧				67
教職実践演習 自己評価シート				69
年間の主要行事一覧				70
年度末・年度始 教職ガイダンス日程				71
教職支援センター 利用状況				72
教職支援センター中期行動計画				74
教員免許状更新講習について				76
教職支援センター年報 投稿規程・執筆要領				79
教職支援センター委員会委員名簿				81
教職支援センター規程				83

ノートが取れる・文章が書けるための表現指導

——書き取り・書き写しを活用して——

奈良工業高等専門学校 一般教科教授 鍵本 有理

1. はじめに

筆者は奈良工業高等専門学校で国語分野の授業を担当している。高等専門学校（以下、高専）は、工業に関する技術者養成を目的として発足した教育機関であり、高校生から大学生に相当する幅広い年代の学生が在籍している。最近では工学系分野においてもコミュニケーション能力の涵養が重要課題となっており、高学年を対象とした日本語表現の類の授業においては、就職・進学に即した、手紙の書き方や面接・小論文の指導などもしている。これらは学生にとっても必要性の実感しやすい内容であり、動機付けが比較的容易である。

一方、高校3年間に相当する低学年では検定教科書を使った授業を行いながら、国語表現に関する内容も挿入する必要がある。文章表現の課題として、通常よく行われるのは、何かテーマを設定して文章を書かせるというものである。しかしながら、よくいわれる「思ったことを書く」という指導だけでは、「読み手」を想定しない、独りよがりの文章になってしまう恐れがある。また、最近は携帯電話の普及もあり、自分から発信するのは得意である、抵抗がないという学生も増えているようだが、「人の話を聞く」「論説文を読む」といった、書く前提となる「受容」が十分ではない学生が多いように見受けられる。

そこで、本稿では、高専における授業実践の中から「書き取り（ディクテーション）」と「書き写し」をふまえて、学生が聞き取り、文章を書くことを目指した教材を紹介する。

2. 書き取り(ディクテーション)を生かした教材

ディクテーション (dictation) とは「書き取り」の意で、主に英語学習に用いられている。精神科医の和田秀樹が日本語に応用する効用を説いており^(注1)、ここでは国語の授業への応用について紹介する。

もっとも基本的な方法は、新聞記事などの200～250字程度の文書を教師が読み上げ、書き取らせる、そして正解の文章を提示し、各自で答え合わせをさせるというものである。その際、教師は3回朗読し、プリントの一番下には〈1回目〉の欄を作り、走り書きでよいからメモをとらせ、〈2回目〉は、〈1回目〉のものに加筆・修正、〈3回目〉は一番上の欄に表記にも留意して最終的な答案を書かせる。また、書き取らせるプリントの裏面に正解の文章を逆さに印刷しておき、折り返して、自分の書いたものと比べられるようにしておき、自己添削させるとよい(図1)。

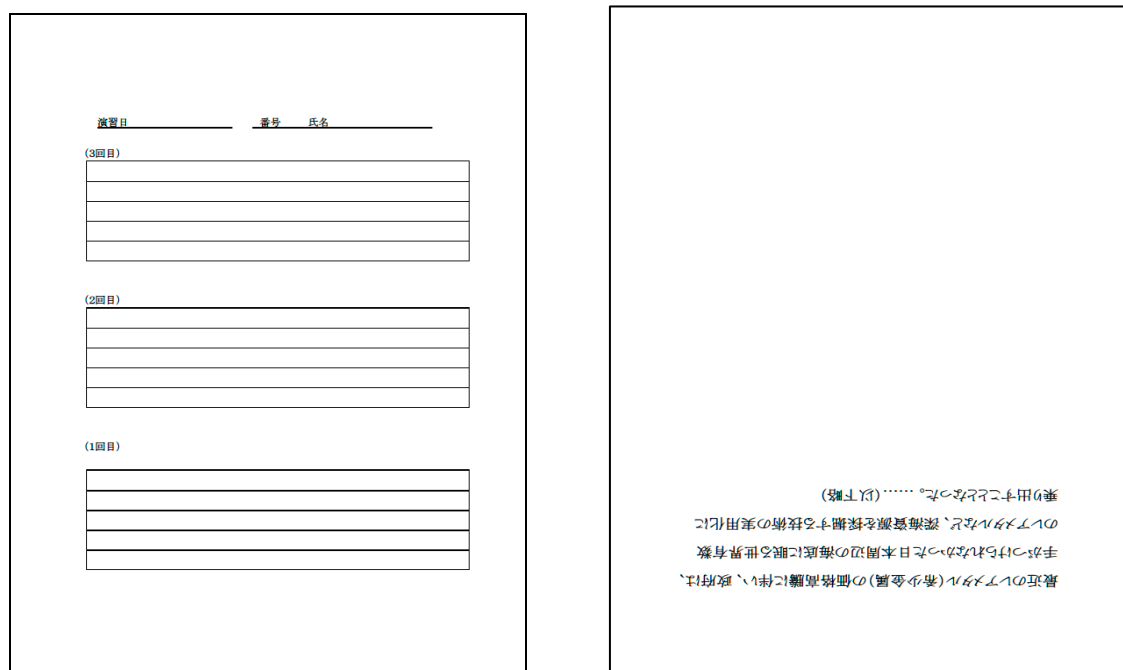


図1 ディクテーション教材プリント例（左が表面、右が裏面）

この手法は焼山廣志の考案によるものであるが、ノートが取れない、特に板書を写すことはできるが口頭で述べられたものを書き取れない、という場合に効果があるとのことである（注²）。また、題材となる文章を選ぶときに、どのような分野のものにするか工夫することで、それぞれの分野の語彙を増やすこともできる。ただ、ある程度ノートが取れる学生の場合、このようなトレーニングを繰り返すことは若干易しく感じられる場合もある。

筆者の場合は、上記の方法を1年生対象に試行したことがあるが、普段の古典の授業で現代語訳を口頭で述べながら書き取らせるという作業を取り入れており、それがそのままディクテーションになっていることに気がついた。そこで、以前から学生が聞き取りやすい語彙を選んで訳を考えていたが、語彙を増やすため、わざとむずかしい熟語を使い、板書で確認させることなども意識して行うようになった。

また、文章以外の、たとえば部活動での連絡事項など、日常生活においてメモをとる・伝達する、という内容のトレーニングとして、筆者が実践したのが以下の課題プリントである（図2）。

たとえば部活動で試合がある、という設定で、日時や集合時間、場所、持ち物や注意事項などを口頭で教師が伝え、上の空欄にメモをとらせる。その後、それをもとにクラブで掲示を出す、あるいは配付文書を作るという場合を想定させ、掲示物や文書の内容をまとめさせるというものである。

この作業を行うと、話し言葉と書き言葉の違いを実感でき、またどのような順序で書いたらよいか、読み手の立場に立った文章の書き方を意識させることができる。最近では付録に音声CDのついた教材（注³）も市販されており、このようなものを使って低学年だけでなく、専攻科生（大学3・4年生に相当）を対象に、「用事を頼む」「餃子の作り方」などを

題材に書き取りの授業を行ったところ、授業アンケートの結果を見ても好評であった。

「仕事のできる人間になろう！」 その② メモを取る方法

【練習1】教師の話した内容のメモを取ろう（横書きでよい）。

【練習2】練習①のメモを元に、掲示用のメモを作ってみよう（これも横書きでよい）。

【練習1】のメモは、電話などでとりあえず記録する場合に使われる。一方、連絡用（特に文書だけを掲示・配付する場合など）は、【練習2】のように、内容を整理してまとめた方がわかりやすい。目的用途に応じて、読む人のことを考え、内容が正確に伝わるような心がけがまず大事である。

組 番
(氏名)

図2 書き取りのための教材プリント例

3. 書き写しの効果

最近、新聞のコラム欄（朝日新聞の「天声人語」など）の書き写しが注目されている。書き写しの効果については、あらためて述べる必要もないであろう。文章の構成や漢字・語彙の学習につながることはもちろん、たとえば古典のノート作りにおいても、古文や漢文の原文を筆写させることは広く行われており、それによって古文の仮名遣いや漢文の特徴などを意識せずに身につけている場合が多い。

以前は、新聞の書き写しがそれほど話題になっておらず、3年生を対象に書き写しをさせる導入教材として、まず次ページに掲げたプリント（図3）を作成した。筆写時間を計るために、学校用タイマー^{（注4）}という、大きな電光文字で時間を表示できるものを用い、各自で記録しやすいようにした。

このプリントで書き写しの要領と意義を教えたのち、冬季休業中の課題として、新聞の書き写しをさせることとした。最近では新聞を購読していないという家庭も多く、またどのような記事がよいか見本を示すためにも、例として新聞記事5本のコピーを配付し、プリントで次のような説明をした（原文は縦書き）。

新聞などの書き写し（記事5本以上）

が成績評価に重要であることを説明している効果もあったのであろうか、提出を促した場合もあるが、3年生（約200名在籍）のほぼ全員が提出した。

読みのわからない語は、調べてふりがなをつける（色ペンで）
 （意味のわからない語を書き出し、意味を調べる）

（感想・意見）

（姓 名 年 月 日 期・夕刊）

科 番 氏名

時間

図4 新聞書き写し用のプリント

残念ながら、ふりがな・語句調べについては手を付けていない学生も多かった。しかし、「感想・意見」の欄には1、2行でも記入しているものが多く、また自分で新聞記事を探してきた学生もかなりいた。年末らしく、「片付け法」を題材とした記事や、工学の技術開発に関する記事、安倍新政権などの政治関連記事や読者投稿欄、読売新聞「編集手帳」や産経新聞「産経抄」などのコラム欄等々、学生の選んだ記事は予想以上にバラエティに富んでおり、教師としても目を通して興味を持てる記事が多かった。

実は、この課題だけでなく、1年生から「読書ノート」（毎月最低1冊、長期休暇中は2冊以上の本を読んで記録）という課題を義務づけ、3年生では新聞記事も記録させるようにしていたが、あまり効果が実感できずにいた。しかし、この課題で学生なりに新聞に以前より親しむことができていることが確認できた。

また、その後、新聞の読者投稿欄に投稿し採用された学生も出てきた（「記事に友の名手紙で祝おう」朝日新聞「声」欄、2013年1月19日朝刊）。当該学生は、夏季休暇中にも自主的に新聞へ投稿していたが、残念ながら不採用であったと聞いていた。それが、今回は採用になり、奈良高専の広報誌「CAMPUS」114号（平成25年3月19日発行）にも取り上げられた。以下にその学生が広報誌に寄せた文章を引用する。

国語の授業で新聞記事の書き写しを始めたことをきっかけに、投稿欄に目を通す機会が増えた。あらゆる世代からの時事に対する見解を知ることができ、興味深いものがある。

そんな折、花園ラグビー場で行われた高校ラグビーの全国制覇の記事に旧友の名前を見つけ、その活躍ぶりに驚き、またこれまでの彼の努力を考えると脱帽の思いであった。この感動を文章にしようと思い立ち、投稿した。(以下略)

期せずして新聞記事の書き写しを取り上げられており、筆者自身驚いたのだが、以前は不採用であったことを考えると、新聞記事を写すことが文章の構成などを身につけることに役立ったよい例だったのではないかと考える。

4. むすび

上記のような教材開発は、当然ながら個人だけでは限界がある。筆者の場合は以前から日本語表現関係の講義を担当している教員と個人的に情報交換をしていたが、豊橋技術科学大学が実施している高専連携教育プロジェクトに 2010 年度より参加するようになり、他高専の国語科教員やZ会国語力研究所の方々と共同研究できるようになったことが非常に役立っている。本稿で紹介した以外にも、当プロジェクトの成果として「漢和辞典を利用した漢字課題」や「マイクロディベート」など、多くの教材をご教示いただいた。各高専ですでに実践され、効果が確認された教材を共有することは、教員に負担をかけることなく、創造的な授業を行うためにきわめて有効である。

また、教科教育の面だけでなく、担任としてのスキルなども含め教員としての資質を向上させるには、何よりも他の教員との交流が効果的である。当たり前のことではあるが、これから教員を目指す学生にはもちろん、大学教員にもそのことを意識しておいてほしいと思っている。

注

- (1) 和田秀樹 (2008)、『「産経抄」で学ぶ 国語力が急上昇する聞き書きトレーニング』、産経新聞。
- (2) 焼山廣志 (2011)、「日本語文章表現法演習レポート集 2011 年」、私家版、86-107 ページ。「工学技術者教育における日本語コミュニケーション能力向上メソッドの開発」として、第 13 回九州工学教育協会賞および第 20 回日本工学教育協会業績賞受賞。
- (3) たとえば、野田尚史・森口稔 (2004)、『日本語を話すトレーニング』、ひつじ書房、Z会国語力研究所 (2008)、『ほんとうの「国語力」が身につくドリル①』『ほんとうの「国語力」が身につくドリル②』など。
- (4) 日本セック社製 (型番: ST-4S)。大型のクッキングタイマーのようなもので、磁石で黒板に貼り付けることもでき、カウントアップ・カウントダウンが表示できる。ディベートなどでも時間が明示できる効果がある。